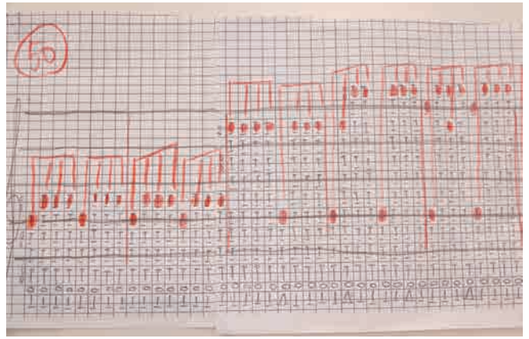
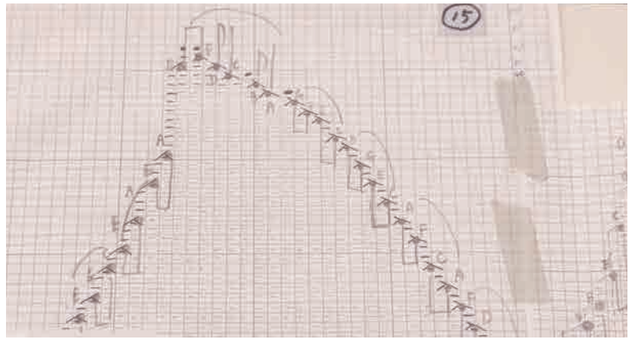
コンサート「Knitted Score」

様々な事象から音楽を発生させてきた野村誠さんが、新作《いとなみの風景》で平川が制作した作品の編み図全 50 パーツのうち 11 パーツを 9 曲の楽譜に変換し、ピアノ、オルガン、鍵盤ハーモニカで演奏しました。

【日時】1 月 15 日（日）14:00〜15:00
【演奏者】野村誠（作曲家／ピアニスト）
【曲目】編み図 2、編み図 15＋16、編み図 10、編み図 3、編み図 22＋27、編み図 50、編み図 8、編み図 1、編み図 9





野村誠（作曲家 / ピアニスト）

最近の活動に、《無人駅の音楽会》（びわ湖・アーティスツ・みんぐる2021）、《Listening to Glenda Leon》（国際芸術祭あいち2022）。
問題行動トリオ《ビジュツセッシュ》（十和田市現代美術館）ほか。著書に『音楽の未来を作曲する』（晶文社）ほか。http://makotonomura.net

くりの図書館職員による絵本の読み聞かせ

湧水町くりの図書館職員による「編み物」が物語内に登場する絵本の読み聞かせを行いました。

【日時】1 月 21 日（土）・2 月 4 日（土）
各日 14:00〜（30〜40 分程度）

作家による公開制作

会期中に《空（くう）に刺繍》の公開制作を実施しました。

【実施日】
12/28（水）、1/4（水）、1/5（木）、1/11（水）、1/12（木）、1/13（金）、1/19（木）、1/22（日）、1/27（金）、1/29（日）、1/31（火）、2/1（水）、2/3（金）、2/4（土）、2/7（火）、2/8（水）、2/9（木）、2/10（金）、2/11（土）、2/12（日）

湧水町で集めた手編みの編み物とエピソード

マフラーしか編んだことがなかったけど、当時1～2歳の長男のために本を見ながら模様を入れて初めてセーターを作ってみました。
不器用なので上手く出来なかったですが、長男に着せた時はうれしかったです。

私が1・2才の頃、不器用な母がセーターを編んでくれました。マフラーくらいしか編んだことがなかったそうですが、本を見ながら編んでくれたそうです。

高校生の頃から編み物が好きで、たくさん作りました。
パイナップル模様が好きで、毎日少しづつ時間をかけて作成しました。
最近は視力の低下や病気もあり編み物から遠ざかっていましたが、今回のプロジェクトを見て、また作りたいと思うようになりました。

27年くらい前に年子の兄弟（息子）の為に編みました。
長男があの頃（1、2才）ケロケロケロッピーのキャラクターが好きで（動物好きでもあって）結構時間をかけて編みました。（1年ぐらいかかったかなあー）
でも着てくれた時は、私はうれしかったし、長男も喜んで着てくれました。

4才の孫（男の子）に編んだのですが、少しチクチクするみたいで、かぶってくれませんでした。6才の孫（女の子）は、おそろいで作ったので、たまにかぶってくれました。カギ編みで、棒編みのように編みました。

私の娘が小学校で友達とのトラブルがあり、毎朝のように腹痛、頭痛をうったえて、学校に行けなくなっていた時期がありました・・・
その時にちょうど実家に帰ってきていた旦那のお姉さんが、「元気に学校に行けるように!!」とお守りを編んでくれました。なのでそのお守りの中に腹痛などがなおる薬として、整腸剤を入れて、ランドセルにつけてもっていっていました。
色々ありましたがおかげで今は元気に登校してます。

娘が学生時代に練習用に編んだものです。編み物に興味を持ち始めて、試行錯誤で編んでいたけど、毛糸が足りなくなって、未完成なままでした。
今ではキンチャクを器用に作っています。

15年位前に私の姉が正月に娘さんが贈ってくれたこれと同じ編み方の肩掛を見せたので私も欲しくなり姉のを見ながら編んでみました。
実物と全く変わらず編み上がったので姉も見てこれは上出来だとほめてくれて私も大変うれしかった事を記憶しております。

12年前に義父が入院し、家族全員で入れ替わりで付き添いをしました。その時、義姉が教えてくれた編み物です。
その義父はその入院時に亡くなりました。今年の11月に13回忌をします。その時はコロナが終息して県外からの親戚を呼びたいと思います。

38年ぐらい前に付き合いはじめた彼（現在夫です）に編む予定だったセーターです。
子供の頃からマフラーや手袋、ストール等を編んでいました。初めてセーターに挑戦した22才の頃、彼にプレゼントするつもりで編み始めて、仕事が終わってから編み物教室に通いながら頑張ったけど、目を減らす段階になったら教室に通う回数も仕事の関係でだんだん少なくなり、結局出来上がらず途中のまま、タンスの奥に忘れられた存在になってました。
今回の企画で初めて主人はこの事を知ることとなりました。

残り糸で、色を変えながら編んでいった一作です。残り糸でも配色でステキな作品になり、大満足でした。
虫に食われたりして、今は着れないのですが、捨てきれずにタンスの中で眠っていました。

姉からプレゼントされた、カーディガン。
大切にしてきました。ありがとう。

日常の多忙と雑念を逃れるために無心になり、数多く編んだ中の一枚。なぜか一度も着ることはなかった一枚です。たしか 40 年くらい前に編んだかな。材質はシルクとウールの混紡です。

結婚してまもなく、主人の仕事が外勤だったので、寒くないように機械で編んだセーターです。
「ありがとう」の言葉はなかったと思いますが、結構着たので、ボロボロですが、良かったら作品の素材として使って下さい。

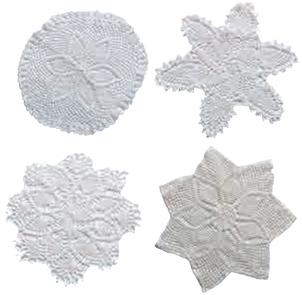
いつか不明だが、祖母が母のために編んだセーター。

夜や雨の日は、母がよく編み物をしていました。
毎日少しづつコツコツと。大きな作品に仕上がったのを見ると、すごいな！キレイだな！模様がかわいいな！と思いました。
子供の頃はよく手編みのセーターやチョッキを着ていたなぁと思い出します。お花のモチーフは特に気に入っていました。

私が高校生の頃、当時付き合っていた恋人からクリスマスプレゼントとしてもらったものです。
私が福岡の短大に進学したため、自然消滅のような感じでなんだかもやもやしていたことを思い出します。

自分の物で簡単なマフラーや手袋は編んでいましたが、これは時間のかかるセーターを初めて、異性の為に作ったものです。それが現在の主人です。
最初は本の編み方ばかりを見て編んでました。すると主人のサイズにあわない小さな物ができあがり、その時に 10 センチ ×10 センチのゲージというもので長さを決めながら編むという事を友達におしえてもらいました。試行錯誤しながらやっと主人サイズのセーターが出来あがりました。
昔は防寒で毛糸のセーターは普通で主人も喜んで着てくれました。現在はあったかく軽くてリーズナブルなフリース素材などがでてきているので手編みのセーターのプレゼントは想いが重すぎると今では思われそうです。（笑）

若い頃から手芸が大好きでした。最初にはじめたのが編物でいろいろ作りました。この作品は 20 年位前かと思います。自分で着る為に編みました。
編物歴は60年以上になります。現在は小物、たわし、ピンクッション、帽子など編んでいます。



仕事の合間の時間やヒマなときに、作ったレースあみです。
白のみの色ですが、きれいに出来たと思います。もともと編み物が得意なので作りました。

「手編みの物語をあつめる」プロジェクトに寄せて

本プロジェクトは、霧島アートの森のある鹿児島県湧水町を舞台に 2021 年の 4 月から 2023 年の 2 月までおよそ 2 年にわたり展開された。平川はこれまで地域に一定期間滞在し、土地や人々と深く関わりながら作品を制作する手法を多く採ってきたが、プロジェクト期間中（特に 2021 年）はコロナ禍ということもあり、滞在や人との接触を極力避ける方法を余儀なくされた。それでも入念な対策を講じながら平川と地域の人々との交流は育まれ、様々な立場の人が関わった地域プロジェクトが展開された。

プロジェクトは、湧水町の人々を対象に過去に製作した「手編みのあみもの」と「エピソード」の募集、それらを用いて平川が作品を制作、展示終了後あみものを糸にほどき、2022 年度の個展でほどいた糸を使った新作を発表するという流れで行われた。

手編みのあみものとエピソードを集める方法として、本館を含む町内の 4 施設を受付場所とし、提供者に都合のよい受付場所まで持参してもらうようにした。毎月発行される町の広報誌に募集を案内するチラシを一緒に挟んで町内の全戸に配布したり、チラシを町内の施設に配架したりすることで周知を図った。募集期間が進むにつれて徐々に集まるようになり、最終的に 20 人から集めることができた。

募集期間終了後、集めたあみものとエピソードを平川の元に送り、作品の制作が行われた。実物を目の前にして改めてそれらの持つ存在感やあみものに込められたそれぞれの想いを実感したようだった。各あみものは金糸でつながれ、タペストリーのような一つの大きな作品に仕上げられた。エピソードは会場が図書館ということもあり、各自のエピソードが本のページの形をした紙に記されていった。

仕上げられた作品は「いとなみ」と題された展覧会として、会場のくりの図書館の小会議室と和室スペースに展示された。また、会場内には図書館の司書が選書したあみものが物語内に登場する本を置き、鑑賞者が自由に読むことができるようにした。本には司書が手作りしたしおりも挟まれ、作品とともに温もりを感じさせるものになった。新型コロナウイルスの影響により当初の開幕日から 1 週間遅れての開幕となったが、町内を中心に多くの人に足を運んでもらった。鑑賞者はそれぞれのあみものにその持ち主にしか語ることのできない記憶や物語が刻まれていることに感銘を受けている様子だった。

展示終了後、集まったあみもののうち寄贈してもらったものを参加者と一緒に糸にほどくワークショップを開催した。編むことに比べてほどくことに特別なスキルが必要ないこともあってか、あみもの経験の有無に関わらず子どもからお年寄りまで幅広い年代の人々に参加してもらうことができた。誰かが編んだあみものに思いを馳せながら糸にほどいていく時間はとても穏やかで、会場はゆったりとした雰囲気に溢れていた。初対面の参加者同士が他愛もない会話を重ねながらほどかれたあみものは、たくさんの毛糸玉へと姿を変えていった。

ほどかれた毛糸を素材に、平川は「間借りオープンアトリエ」と題した公開制作を行い、作品制作の様子を一般の人々に公開した。くりの図書館を会場に行われた公開制作には、子どもから高齢者、編み物が趣味の人から過去に編み物に挑戦したが今はしていない人、たまたま通りかかって面白そうだからと来た人まで様々な人が制作の様子に興味深く見入っていた。制作の合間に来場者と編み物に関する思い出話を語り合ったり、編み方のコツなどを教わったりする平川の姿が印象的だった。

プロジェクトの最終章として本館で開催した個展「かなた／あなたとの会話」では、収集した編み物とエピソードを元にした新作インスタレーションや近作を中心に計 8 点の作品が展示された。

湧水町内の 20 人の人々から集めた手編みの編み物とエピソードは、映像、写真、編み図（編み物の設計図のようなもの）等とともに構成され、《いとなみの風景》と題された作品に仕上げられた。集めた編み物はそれぞれの編み方を再現しつつ一つにつなげられており、膨大な時間と労力が費やされたことを思い起こさせる。また、編み物にまつわる各エピソードはアニメーション映像で紹介された。それぞれの編み物に込められた日常的で何気ないエピソードを知ることで、編んだ人、編み物を受け取った人両者の物語に思いを馳せることになり、鑑賞者と作品との間に親密な関係性が生まれる。

《終わりのない物語》は、2017 年に福岡で開催されたグループ展出品の際に集めた編み物とエピソードを元にした作品で、当時の作品に今回新たに毛糸を編み足したり、作品のピース同士をつないだりして、当時の姿とは異なる形態になった。それぞれの編み物にまつわるエピソードはここでも紹介され、目の前の作品の素材となった毛糸がどのような思いや背景を内包しているのか思考を促す。過去の作品に編み足すことで作品が再び鼓動を始め、新たな物語が吹き込まれていく。「編む」という制作方法の物語性や永続性を強く意識させられる作品である。

その他に、空間に漂うように浮遊しながら幻想的な雰囲気を醸し出す《終わらない物語》《物語のつづき》、目に見えない空気の流れを表したような《空相 01》《空相 02》、現実世界や自分の存在を確かめるようにひたすら目の前の大きなビニールシートに針を刺し続けた《目の前の現実に針を刺す》などの作品が展示された。

《空（くう）に刺繍》は、本展会期中に開催された公開制作の中で作られた作品で、ガラス越しに広がる本館の野外風景を望みながら平川が糸を空間に縫い込んでいった。来場者からの問いかけにも気軽に応じながら制作された本作は、最終的に幅 7m 弱、高さ 3m 程の大きさに仕上がった。作品が目の前に立ち現れる過程を見せることで、来場者との対話のきっかけが生まれ、作品への理解もより一層深まる機会になった。

会期中は先に述べた公開制作をはじめ、「クロストーク」、「レクチャーパフォーマンス」、「コンサート」、「絵本の読み聞かせ」等多彩な関連イベントを実施した。美術の専門家はもとより、舞台美術家、作曲家、図書館司書といった美術とは異なる分野からもゲストを迎えたことで、美術の枠組みを超えてより多様な人々へとアプローチすることができたと考える。

展覧会タイトルが示すように、本展は編み物を媒介に目には見えないけれども編み物の向こう側に確かに存在する編み物を編んだ人、それを受け取った人へと思いを膨らませるものであり、鑑賞者と作品、鑑賞者と作家、鑑賞者同士、そして自己との対話を促すものでもあった。立場の異なる様々な他者の思いを受け止めながら対話を試みることの尊さを、平川の作品群を通して強く感じさせるものであった。

以上、プロジェクトの一連の流れを振り返ったが、平川を起点に様々な立場の人々がつながりつつ展開されたことで、美術の領域にとどまらない多彩な広がりを持ったプロジェクトになったと考える。土地や人々の間に流れる時間に身を委ねるように溶け込んでいく平川を傍らで見ながら、平川を中心とした人的ネットワークと呼ぶべきものがプロジェクト期間中生まれていったのを私は感じた。平川を媒体に人々が集まり、交差し、通過し、再びそれぞれの行き先へと向かう―。様々な人々の事情や思いを胸に、目の前の糸を見つめながらただひたすら手を動かし編み続ける平川は、歴史に記されることのない日常にあふれる無数の物語を作品にとどめながら、その人の生きた痕跡を掬い取ろうとしていたのかもしれない。

矢野佑輔（鹿児島県霧島アートの森 学芸員）

平川 渚

1979 年大分県生まれ、2013 年より鹿児島県に居住。各地に滞在し、その場に残る固有の素材をもとに空間に対して糸を編み、かたちを立ち上げるインスタレーション作品を主に制作。また、人々から集めた古着や編み物を素材に個々の記憶や出来事へアプローチし、作品として再編する試みも並行して行う。

〈主な個展〉

2016 年　イトナム / galerie6c（兵庫）
2015 年　ウミのシロ / 大法寺 書院（静岡）
2015 年　あたらしい物語を編む / レトロフト Museo（鹿児島）
2013 年　地面を編む / スタジオイマイチ（山口）
2012 年　カセツ世界 / レトロフト Museo（鹿児島）
2011 年　カリソメの糸 / WALD ART STUDIO（福岡）
2008 年　部屋を編む / gallery blue ballen（大分）

〈主なグループ展〉

2022 年　Layover/ 日本センター（コロンビア）
2021 年　生きる私が表すことは。ー鹿児島ゆかりの現代作家展 / 長島美術館（鹿児島）
2017 年　Local Prospects 3 原初の感覚 / 三菱地所アルティアム（福岡）
2017 年　メッセージ 2017 南九州の現代作家たち / 都城市立美術館（宮崎）
2013 年　むすびじゅつ / 静岡市内各所（静岡）
2009 年　ＶOCA 展 2009 / 上野の森美術館（東京）
2008 年　おおいたの若い作家たち / 大分県立芸術文化会館（大分）

〈主なアートプロジェクト〉

2018・2016 年　糸島国際芸術祭 糸島芸農（福岡）
2016 年　羽犬塚プロジェクト（福岡）
2016・2015 年　信濃の国 原始感覚美術祭（長野）
2016-2011 年　FUKIAGE WANDER MAP（鹿児島）
2014 年　するがのくにの芸術祭　富士の山ビエンナーレ（静岡）
2009 年　別府現代芸術フェスティバル 2009 混浴温泉世界（大分）

〈作品収蔵〉

都城市立美術館

作家公式ホームページ
二次元バーコード

謝辞

本事業の実施にあたりご協力を賜りました下記の関係機関、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

折田順子
玉作サダ子
徳澄りか
山平美保
權田直博
馬頭亮太
崇城大学芸術学部デザイン学科馬頭研究室
株式会社オンドデザイン
下薗詠子
川浪千鶴
佐々木文美
野村誠
森山年雄
photologue
原田真紀
木浦奈津子
原田正俊
都城市立美術館
湧水町
湧水町教育委員会
湧水町くりの図書館
一般社団法人霧島山麓湧水町観光協会
吉松物産館ふれあい市場
鹿児島県立図書館

手編みの編み物とエピソードの募集にご協力いただいた湧水町の皆さん

［記録集］
アートラボ 美術作家 平川渚「手編みの物語をあつめる」プロジェクト

執　　筆：平川渚、川浪千鶴、矢野佑輔
デザイン：野元かおり
撮　　影：森山年雄、平川渚、鹿児島県霧島アートの森
編集・発行：鹿児島県霧島アートの森
発 行 日：2023 年 3 月 31 日
© 鹿児島県霧島アートの森 2023

2021-2022 年度 鹿児島県霧島アートの森　アートラボ

美術作家 平川渚
「手編みの物語をあつめる」
プロジェクト

霧島アートの森
KIRISHIMA OPEN-AIR MUSEUM